

発掘調査だより

1. 欲賀南遺跡の調査

区画整理工事に伴い、^{ほしか}欲賀町字大蔵地先を発掘調査中です。大蔵地区は境川沿いに水田、その北側の小山のように高くなったところに畑が作られています。畑の部分は元々、なだらかな丘のような地形であったと見られ、その後、中世から近世にかけての土器を含んだ土が堆積（厚さ約30cm～1m）し、現在の地形になったと考えられます。これまでに古墳跡や奈良時代～鎌倉時代にかけての集落跡などがみつっていますが、今回さらに弥生時代中期の竪穴住居跡が確認されました。竪穴住居は中央に大きな穴、壁近くに柱穴を掘るなど、この時期の住居の特長を備えています。こうしたことから、やや型崩れはしていますが、平面の形が円形をした竪穴住居であると考えられます。住居内からは、^{ませいせきぞく}磨製石鏃の（表面を研磨し、滑らかに加工した^{ばんがん}石鏃）製品・未製品や石材である粘板岩のほか、^{だせいせきぞく}打製石鏃の材料になるサヌカイトもみついています。他地域から入手した石材を使って、住居の周辺で石器の加工を行っていたことがわかります。



▲欲賀南遺跡E-2拡張部遺構平面図

欲賀南遺跡では、これまでに弥生時代中期の土器や石器は出土していますが、竪穴住居の発見は初めてであり、市内の弥生時代を考えるうえで貴重な資料を追加したといえるでしょう。

(小島)



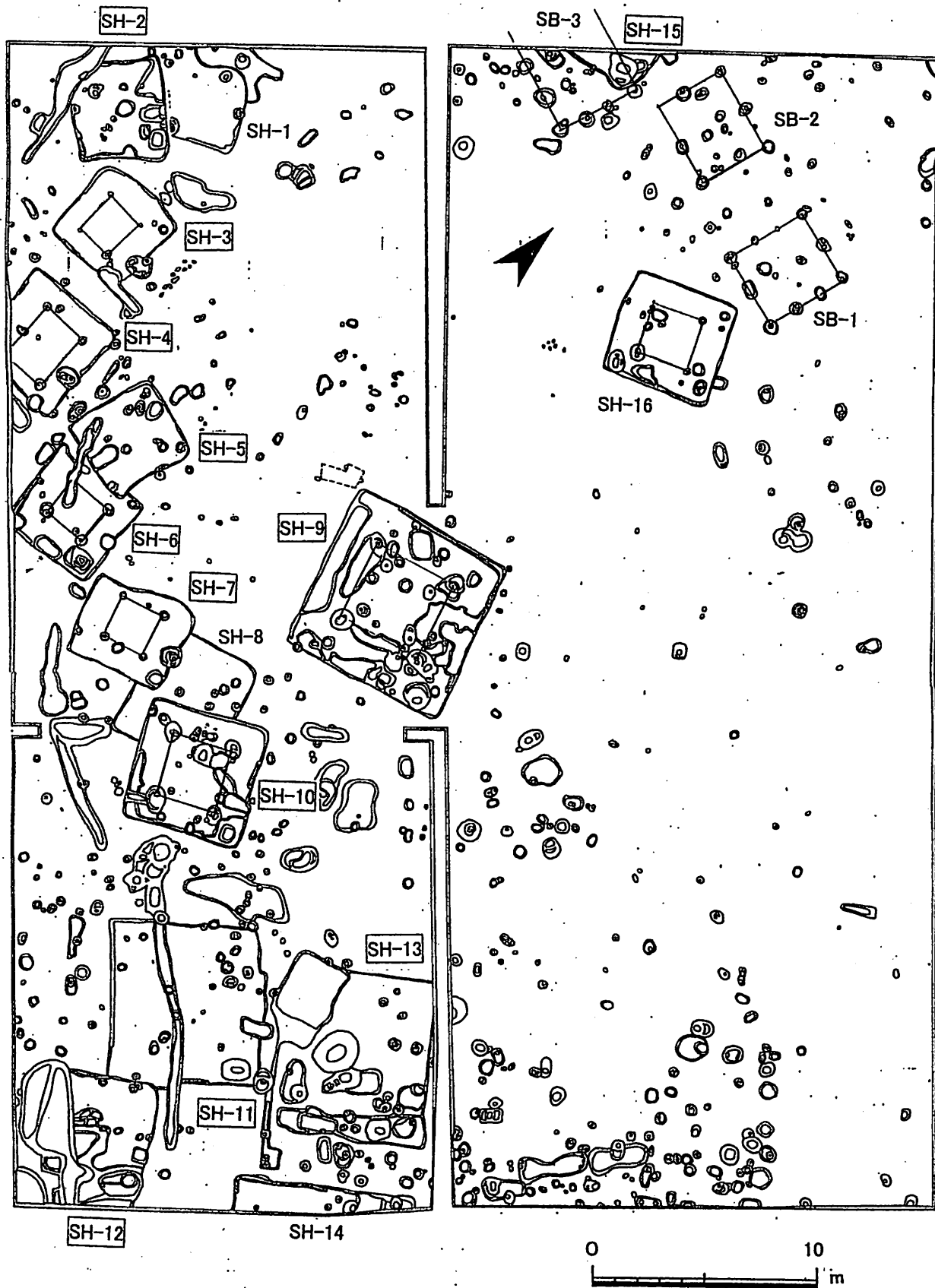
▲発掘調査位置図

2. 吉身北遺跡の調査

梅田町において実施していた調査も8月初旬で終了しました。今回の調査では、古墳時代後期の竪穴住居 16 棟 (SH-1~16)、掘立柱建物 3 棟 (SB-3)、井戸 1 基のほか多数の柱穴を検出しました。竪穴住居は 12 棟にカマドが設けられており、うち 11 棟が東辺に、1 棟が南辺につくられていました。また、東角に土坑を掘る住居が多いなど、竪穴住居の構造に規則性があることもわかりました。住居の年代は 6 世紀後半頃と考えられますが、SH-1~10 と SH-11~16 とでは住居の軸の方向が違うことから、少し時期が異なる可能性もあります。また、SH-9 は検出した竪穴住居中最大で、しかも他の住居から離れた位置につくられていることから、グループの長の家など、集落内でも特別な建物であった可能性も考えられます。

吉身北遺跡は、この時期としては市内最大級の集落と考えられており、今回の調査によって、さらにその内容が明らかになったといえるでしょう。

(畑本)



▲吉身北遺跡遺構全体図

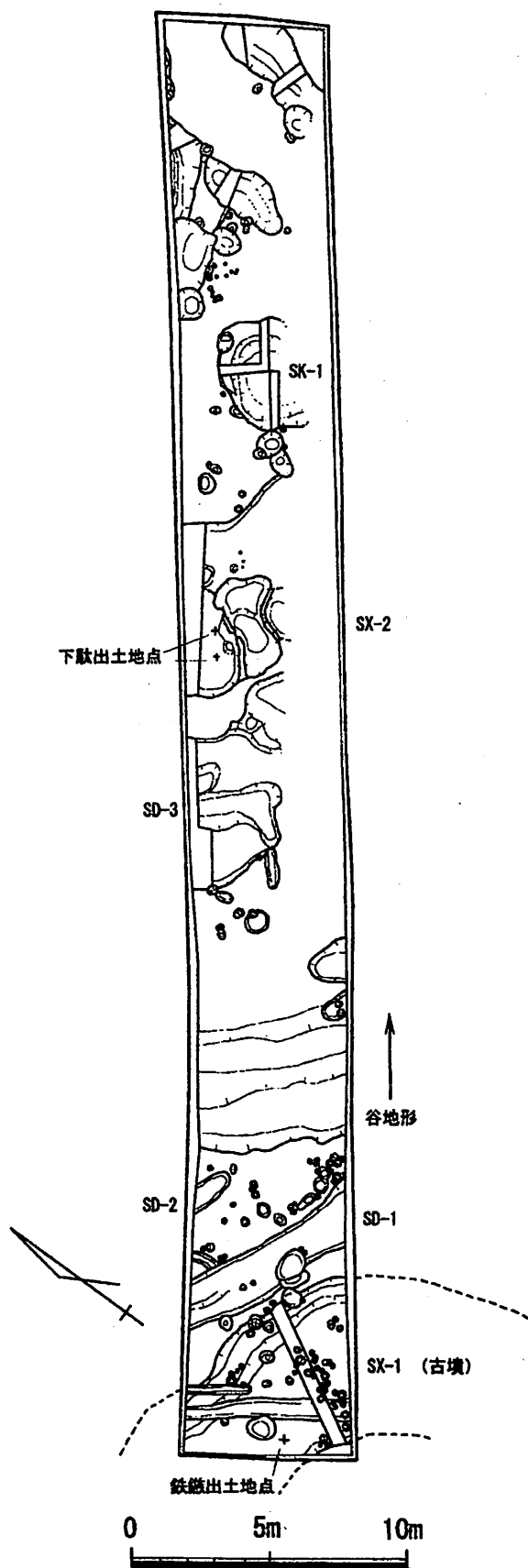
3. 吉身北遺跡・赤目遺跡の調査

勝部町地先において、宅地造成工事に伴い道路予定地の約 320 m²を対象に発掘調査しました。調査地は吉身北遺跡の西端、赤目遺跡との境に位置しています。調査の結果、古墳時代後期の古墳 1 基、溝、土坑（大きな穴）、ピット（小さな穴）、中世の耕作痕などが検出されました。

古墳（SX-1）は調査区の西端で周濠^{しゅうこう}の一部を検出しました。周濠は幅約 5 m、深さ約 50 cm の規模で、円筒埴輪^{えんとうはにわ}の破片や須恵器^{すえき}、土師器^{はじき}、鉄鏃^{てつそく}が出土しました。出土遺物から 6 世紀前半の年代が考えられます。ここから北約 100m の位置にある、勝部町字松塚で行われた調査（乙貞 90、91、95 号）でも、円埴 4 基と方埴 1 基が確認されていますが、埴輪が出土していないという違いがあります。また、SX-1 の北に隣接する 6 世紀前半の溝（SD-1）からも埴輪片が出土していますが、調査地が狭小ということもあり、詳細は不明です。

調査地の東側は、深さ 1 m、幅 40m 以上の谷地形となっており、底から 6 世紀後半の溝（SD-3）や土坑（SK-1 他）、ピットなどを検出しています。中でも SX-2 は貯水用とみられる土坑が 3 つ連なっており、北から南にかけて順に低くなっています。ここからは下駄^{げた}が片方ばかり 4 足出土しており、注目されます。このほか、谷の上層からは周囲で小鍛冶^{こかじ}が行われたことを示す、鉄滓^{てつさい}が出土しています。谷は周囲の調査状況から、調査地の東側に隣接する道路付近に肩口があると考えられます。今回の調査により、谷の東側に立地する吉身北遺跡の集落が、さらに谷地形となる地点まで広がっていることがわかりました。

（森山）



▲吉身北遺跡・赤目遺跡遺構全体図